

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.96 2023 年 1 月 14 日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

入場者数を制限し感染対策を行っての公演

2022 年 11 月 19 日～ 27 日の間に、京浜協同劇団第 96 回公演が行われました。今回は、朗読劇「米屋はまだ無事か」と古典落語より「正直・清兵衛」の二本立て。コロナ禍の厳しい状況でしたが、入場者数を制限し、感染対策を行っての公演でした。出演された方や観劇された方などから感想を寄せていただきました。

参加、客演として

まだまだ色々教えてください

飛田 ニケ

今年の 9 月末にはじめてスペース京浜を訪れた。友人たちと月に一度の稽古をするためだったが、そもそも私がこの場所について知るきっかけとなったのは、5 月の川崎郷土・市民劇を観劇したことだ。さらに遡れば私が川崎市に引っ越してきたのは昨年 2 月で、自分が住む地域の歴史を調べるなかで、川崎郷土・市民劇と京浜協同劇団とを知ることとなった。回りくどくなかったが、その稽古後に護柔さんから 11 月の公演について案内され、さらには稽古見学、できたら出演しないかということまでごく簡単に伝えられ、気づけば数年ぶりに舞台に乗ることになっていたのだから、今になっては驚くばかりだが、そういう経緯でこの文章を書いている。上演をご覧になった方はご承知のことと思うが、つたない演技で出演者や観客の皆さんに恐縮しっぱなしだった。

それでも稽古の日々でたのしかったことをいくつも思い出すことができる。60 年以上の歴史を持つ京浜協同劇団の公演に参加するという事は、身体を通してその流れの中にいることを感じる機会ともなる。地下の稽古場で台本片手にセリフを口にしていると、目に入って来る活動年譜。そこにある名前を目の前に稽古をしていると、劇団の歴史の中に浮かぶたくさんの顔にみられているような気がしてくる。客演たちの歓迎会で、そのこさんが「(スペース京浜という建物に) 亡くなった先輩たちがいるような気がするけど怖くない」とおっしゃっていたのを思い出す。劇団というローカルな歴史のなかの生きられた経験と、それを残し、繋げようとする力。私でさえそういったものが身に迫って感じられた。そういう場所で演技をす

ること、声を出すことの妙味というものがあるのだろう。

落語劇を観ながら打てば響くように笑う観客たちは、必ずしも劇全体にのめり込んでいるわけではなく(落語なので筋は大方の人が知っている)、鼻唄の役者をみながら、役と同時にそれらの「顔」を見ていたように思う。劇の愉しみに、そのような二重性がある。私が誘ったお客さんは、京浜の客席になじみのないひとたちだったが、それでもたのしんでいたし、それは役者の演技を透かしみるようにして、劇団の歴史に触れていたということだと思う。

朗読劇は、手に持った本と客席の眼前とを行き来しながら演じられる。読むというしかたには、過去と現在と(あるいは未来も?)を短絡させないで、現場のやりとりによって時間や空間がひらかれるようなところがある。お客さんがポカンとしてたら役者にはすぐにそれがわかるし、役者には直接に観客に向き合って言葉を声にする緊張がある。もちろんアンサンブルの助け合いも赤裸々にある。そういった直接性が(能力を超えて)ある種の「ドキュメント」となっていたのではないと思う。

うまくまとまらないが最後に、劇団のことやその周囲のことをおしみなく(冗談を交えつつ)話して聞かせてくれた藤井さんに特に感謝を伝えたい。車内でのおしゃべり、とても楽しかったです。劇団の皆さん、



写真撮影©長坂クニヒロ (以下同)

(2) 京浜協同劇団第 96 回公演

健康に気をつけていただいて、まだまだ色々教えてください!!

京浜協同劇団の創立 50 周年を記念するソングの CD「この日この地でこの人々と」を聴きながら。

「歩く 歩くしかない この道を 自分で選んだ道だから」(「争議団ブルース」)

第 96 回公演を観て

「今は今」

宮崎 玲奈

●はじめに

京浜協同劇団の公演を観たのは、はじめてだった。2022 年 5 月、第 8 回川崎郷土・市民劇『おーい! 煙突男 (ミスター・チムニー) よ〜天空百三十尺の風〜』観劇をきっかけに、京浜協同劇団ホームページに辿り着き、劇団創立 63 年の歴史に圧倒されながら過去公演のアーカイブを眺めた。以上のような事柄がきっかけで、今回の公演に足を運ぶに至った。

演劇であることの支持体は集まりである、と仮定するならば、観客との呼応によって劇は毎回変容する。今回の公演は 10 回あるため、細かく見ると、10 回の出来事が劇場には生じたのだろう。以下、筆者の過ごした観劇の一日について書こうと思う。

11 月 19 日土曜日、残り物のおでんを朝食とし、自宅の最寄駅から南武線に乗り、鹿島田駅着、徒歩で会場へ向かう。途中、道案内らしきスタッフの方に道を聞き、教えていただく。「この日、この地で、この人々と」と書かれたオレンジ色の幟が立つ、公演会場に辿り着いた。これまで劇団の幟を見る機会があまりなく生きてきたので、すでに少しワクワク。感染症対策のため客席数を減らしての公演になっているのだと開演前にアナウンスがあった。当日パンフレットの中に和田庸子さんのお名前を拝見し、ニュースで訃報の情報を得たことを思い出す。京浜協同劇団にとっては、和田さんがいない劇団公演ということになるのか、と思った。筆者は客席後方部、下手側から 11 時の回を観劇した。



●『米屋はまだ無事か』リーディング

作品が始まる前、声は出ますか等の、俳優同士のコミュニケーション、準備運動のような時間があり、それがとても良かった。リーディング公演ということで、準備運動を終えると、俳優は戯曲の書かれた冊子を開き、発話することで次第に役になっていく。

都会のレンタルビデオ店で働くフリーターの男は、ビデオ画面に「米」という文字を見たことから、東北地方に移住し、米屋を開業する。震災発生時の町の緊迫した一時を、ユーモラスを交えつつ描く場と、震災後の街にサメ (コロナウイルスの比喻と受け取ることが出来る) が現れたという場の、主に 2 つから構成される戯曲が『米屋はまだ無事か』だ。「米」ということから、ナショナリズムを感じざるを得ないだろうし、一人の男を主人公とし展開するヒロイズムが物語を貫いていく。繰り返し登場する「米屋は無事か」というセリフを全員で発話する演出は、上記に挙げた戯曲構造に寄り添い、求心的な方向に向かっているとも言える。一方で、高台から図書にお別れを告げる場面は、老若男女の遠くに投げかけるような、さよならの



声は劇場空間に拡散され、響き渡り、グッとくる。春に観劇した川崎市民劇で煙突男を演じていた村上浩史の米屋がインタビューを受け少し空回りしている様子、サメに挑み舞台上から去る姿、空を眺めるシーン、衣装の前掛けも馴染んでいた。図書館司書 (瀬谷やほこ) の声は芯が通っていたし、物語の軸にある図書館という場所に属する人物の役割が伝わってきた。心中カップルを演じる、飛田二ヶの自分自身を伴い役に染まりきることにない姿も舞台にアクセントを加えていた。

●「正直・清兵衛」

落語の演目「井戸の茶碗」を原案にした上演。休憩時間でサッと舞台転換が終わり、舞台はいつの間にか江戸時代になっていた。仏像を引き取ったことをきっかけに起こるドタバタ。特に、四人のクズ屋が登場するシーンが印象に残っている。若菜とき子、篠崎旗江、渡辺そのこ、藤井康雄の四人がそれぞれクズ屋を演じており、高木作左衛門とそれぞれ一連のやりとりを行う。同じやりとりを複数回することがまず笑いを誘うのだが、顔を見せろと言われ、顔を見せる場面

はそれぞれの個性が光る。特に若菜とき子の堂々と舞台上に立つ姿には、同じ演劇人として背筋の伸びる思いがした。千代田ト斎（大谷敏行）の堂々としているのだから、おどおどしているのだからわからない姿も物語と親和していたし、娘（福井杏）の発話する「パパ」にも和んだ。清兵衛（河村はじめ）の観客の方にも発話が向かう様や、高木作左衛門（田中耕一）のシャープな声、ご隠居（城谷護）の朗らかさも印象に残っている。

●おわりに

筆者は普段現代口語演劇を行なっているのだが、どこかで客観的な演技の物足りなさも同時に感じている。そんな折、京浜協同劇団の演劇に出会った。京浜協同劇団の演劇は演劇の、どこか根源的な姿を示す。それぞれが生きている日常がある。日常を生きる自分自身を大切にしながら、役を演じる姿が、舞台上の出来事としてあった。かっこ悪くてもいい、わたしは、わたし以外にはなれないのだけど、それでも演じるのだ。スペース京浜に蓄積されてきたこれまでの時間を思いながら、劇場を後にし、パンフレットの協賛広告にあった中華屋「六龍」でタンメンを食べ、駅へと向かい、わたしはわたしの日常へと帰った。

演じるということは、負けることから始まっているのだと思う。それでも、なお、わたしたちは演劇、演じることを続けていく。わたしの中に残った観劇後の欠片はなお、問い掛け続けている。

京浜協同劇団と私

大井 かおる

私がここに登場する経緯を「米屋はまだ無事か」風にな… 私「文化の仲間の二村さんから原稿の依頼を受けた。私なんか書いていいんですか。ええ？やばくないかなあ」若菜さん「やばいと思う」私「面目ない…」

10年前私はある演劇ワークショップに参加して演劇の面白さを知ってしまいました。声は出ないし何もわからない状態で「何とか上手になる方法はないのか？」とあちこちのカルチャースクールをさまよって始めていた7年前『朗読劇「平和をこの手に」幸区民の戦争体験から』（台本：城谷護さん）の参加者募集に応募した事がきっかけで京浜協同劇団と出会うことができました。この経緯を和田庸子さんにお話したとき「ワークショップで演劇と出会うのは良いことよ。でもねその先はどうなるの？興味持たせただけでほっぴりっぱなしじゃないの、誰もその先を考えていないんだから頭に来ちゃうわ！」とおっしゃった和田さんの熱い言葉が強く心に残っています。京浜協同劇団との出会いがなかったら今でもさまよって続いていたかも知



れません。

その後「ブンナよ〜」「南武線〜」の稽古でいそいそと劇団稽古場へと通うようになります。「南武線〜」の公演後には藤井康雄さんと瀬谷やほこさんが講師の演劇勉強会が月1〜2回ペースで10ヶ月間開催されました。最後まで残った受講生は4人、そのたった4人のためにニールサイモンの戯曲で発表会を開いてくださいました。“演劇は人に観てもらえてこそ成り立つものだ”と言う当たり前なのにとっても大事なことを藤井さんと瀬谷さんのお2人は教えてくださったのだと思います。この後「注文の多い〜」ではドングリの衣装製作を、と瀬谷やほこさんからお声がかかり舞台衣装には興味があったので迷わず参加させて頂きました。とても楽しく劇団の作業場に通っている時に和田庸子さんから「あなたの台詞を書いたの、おりんに出てみない？」と、まさかの出演依頼を頂き、こちらも即答していました。けれど劇団の定期公演は今まで知っていた市民劇や演劇まつりの大所帯とは全く違う少人数演者での密度の濃いお芝居です。ついて行くだけで必死な3ヶ月半の厳しい稽古を乗り越えた時、和田さんは「役に食らいついてきた」と有難い言葉で評してくださいました。

「民家園〜」「煙突男〜」と懲りずに京浜の稽古場に通り続け、今回私にとって客演参加2回目となる劇団の定期公演「米屋〜」の稽古にも勝手知ったる顔で通わせて頂きました。ありがとうございます。演劇の知識も何もない私を受け入れてくださった京浜協同劇団の皆様のお心の広さには感謝の言葉しかありません。京浜協同劇団の皆様とのかけがえのない楽しい思い出が沢山できました。どうぞ皆様お身体大切にいつまでもお元気で活躍ください。



初めての制作チーフを終えて

田中 耕一

京浜協同劇団の第96回公演が11月27日に無事千秋楽を迎えることが出来ました。総計530名以上のお客様にご観劇を頂きました。ご来場頂きました方々、受付スタッフとしてお手伝いを頂きました方々、ありがとうございました。文化の仲間の皆様のご支援に劇団が大きく支えられている事を改めて感じました。この誌面をお借りして改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

今回の公演は、今年5月に亡くなられた和田庸子さんが居ない心の大きな穴。そして戦力としての穴。更にコロナ新規感染者の増加、新加入の青山さんの急病など、前向きな話が無い中での活動となり、精神的にも戦力的にも厳しい状況が続きました。

そんな中、客演の方々が1人、また1人と増えていき、最終的には6名の方にご協力を頂きました。これは、創造面だけでなく、制作面でも助けて頂き、更に劇団員の心にもエネルギーを注いでくれたと感謝しております。

個人的には、今回、初めて制作に加わり、いきなりのチーフ。全てが初めて。公演するまでにやる事も多く、殆どを城谷さんにお任せ状態となってしまいました。

城谷さん、皆さん、私の力不足でご面倒をお掛け致しました。申し訳ありませんでした。

今回、私が唯一頑張れたのは、ポスター貼りとチラシ配りです。

ポスター貼りは、和田さんが残してくれたリストを基に1件1件お願いして廻りましたが、和田さんの様には行きません。中々進まない中を助けてくれたのが、劇団に復帰した渡辺そのこさんです。

3週間に渡り週末毎にポスターを貼らせて頂ける所を探し歩くのを一緒に1件1件を廻って頂き、交渉・ポスター貼りを助けて頂きました。と言うより、最後は渡辺さんの後ろを付いて行き、大変助けて頂きまし

た。それでも和田さんのリストの場所が分からず渡辺さんと二人して道路をトボトボと歩いていると、そこへ城谷さん登場（実は2回も登場）。城谷さんに相談すると、いとも簡単に場所を教えて頂き、どうにかリストにある場所へのポスター貼りを終えられました。

殆ど、他の方に助けて頂いたポスター貼りでしたが、最終的には新規にOKを頂いた場所も増え、次回公演へ繋げられる結果となり、苦労をした甲斐はあったと感じております。ポスターを貼らせて頂いたお店の方々、お家の方々、城谷さん、渡辺さん、ありがとうございました。

また、チラシ配りも力を注ぎました。鹿島田駅周辺で3度に渡り、チラシ配りを行いました。

駅前でおっさんのチラシ配り。チラシを受け取ってくれる方も少なく凄く寂しい気持ちになっている中、時々いらっしゃる京浜のお客様。「私、行く予定だから」と言う言葉。これが、どれだけ心強く、有難かったことか。本当に嬉しかった思い出です。

しかし、一番助けて頂いたのは、またまた登場の渡辺そのこさんです。チラシ配りをお手伝い頂き、私の



倍はチラシを配って頂きました。本当に色々ありがとうございました。

出来たことが少ない制作デビューでしたが、公演の裏側の苦労を体験し、少しでも公演に貢献出来れば良いと考えて頑張ってみました。今は、制作は2度したくないとの気持ちですが、少し経ち公演の成果が見えてくると次回もと思うのかも知れません。

最後になりますが、文化の仲間の皆様、今回もご支援ありがとうございました。

引き続き、京浜協同劇団を宜しくお願い致します。



カーテンコール

会員紹介 第3回——宝川誠さん

映画を年間 200 本観る映画好き

文化の仲間事務局長 山木 健介

会員の^{ほうかわ}宝川誠さんをご紹介します。

宝川さんは、今は定年退職していますが、横浜の港で働いていて、労働組合運動をしていました。平和運動や学習活動にも力を入れてこられました。

とくに有名なのが、映画を年間 200 本観るといった映画好きなことです。現職時代は、カバンに映画のパンフレットを山のように持ち歩いていたのが有名です。

* * * *

宝川さんによる自己紹介

私は、高校まで生まれ育ったのが新潟県五泉市です。合併して政令市になった新潟市の東側に位置します。新潟平野の中にあり田園風景が広がっています。新潟駅から電車で 40 分ぐらいです。阿賀野川の支流早出川が流れ、土壌が豊かな土地でもあります。

昔は羽二重、今はニットやメリヤスが盛んで織物の町として栄えました。水芭蕉、チューリップ、桜、牡丹など花の町としても四季折々の顔を見せています。市の名前のように水も豊富で湧き水で酒造りをしている酒造元もあります。

4 人兄弟の末っ子として育ちました。実家は農家で米や野菜を作っています。私の子どもの頃は手作業で田植えや稲刈りの時期になると近所の人たちが大勢手伝いに来てくれました。腰は痛くなりたいへんな作業です。家のまわりは田んぼや畑がたくさんありましたが、今では宅地化が進んで少なくなってきました。

小学生のときは大雪や台風の年もあり、木造校舎だったのでつぶれるのではないかと必死になって校庭に避難しました。この年の秋には東京オリンピック開催もあったので忘れられない年になりました。

中学校に入学すると、1 学年 10 クラスもあり、毎年クラス替えがあっても 3 年間 1 度も同じクラスにならない生徒がたくさんいました。卒業式は家族の方も出席されるので体育館には入りきれないほどになりました。

中学 1 年生のとき、担任の先生が研修会で沖縄の先生と知り合いになり、沖縄の生徒たちと文通するのがクラスでブームになりました。まだ沖縄返還される前だったので基地のことや知らないことがたくさんありました。

復帰 50 年経っても基地はなくなり、今では新たに作ろうとしています。

高校は地元の商業高校に進学しました。当時、市内には高校が 1 校しかなく、実家から徒歩 10 分ぐらいなので、行くことに決めました。珠算部に所属し、3 年間続けました。

1972 年（昭和 47 年）3 月 31 日に上京し、翌日 4 月 1 日に入社式がありました。上京した日は横浜市電が最後の運行の日で、花電車が走っていて忘れられない日となりました。

仕事内容は、輸出の通関事務で、商社やメーカーの代理で税関に提出する書類を作成していました。オーディオ、鉄鋼、建設機械、薬品など、様々な商品がありました。法律以外にも化学や電気などの知識も豊富に必要とし、中学や高校の勉強がおろそかにできないことが身につまされる思いがしました。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」を合言葉にする港湾労働組合に加入しました。会社からの嫌がらせ、分会の分裂、裏切りもあったけれど、自分は間違っていない、最後は一人になっても信念を貫こうと思いました。周りに闘う仲間がいたからがんばれたと思います。横浜地区労では、常幹、議長、副議長もやりました。

京浜協同劇団の「金冠のイエス」や山手のゲート座で観た「どん底」が印象に残っています。



会員の動向

佐々木勝男さんが本を出版

文化の仲間の会員の佐々木勝男さんは、35 年間川崎で小学校の教員をしてこられました。現役時代は、教育実践に関する多くの本を執筆してきましたが、このたび、教員 35 年の経験をまとめた『教師として歩んだ 35 年の道』を出版しました。生い立ちから教師生活や実践記録など、多彩な経験がつつられています。

A5 判・446 頁 税別 1,600 円 購入ご希望の方は、住所・氏名を記載のうえ、FAX 044-222-3140 で申込みを。

連載 菅野章のわがうたごえ人生——第2回

歌の大好きだった母に教えられた歌をみんなで覚えた

菅野 章

1945年5月29日の横浜大空襲で家を焼かれ、物置小屋生活は1年近く続きました。

当時はまだ国民学校2年生（小学校となったのは昭和22年）だったが、勉強をしたことはほとんど覚えていません。転校した学校の庭の片隅に給食用のブタ小屋があり、2匹の豚がうらめしそうにこちらを見ていたことは記憶しています。

前回、進駐軍の米兵に「ギブミーチョコレート」と叫んだことを記しましたが、その時上陸用舟艇の上からチョコレートをくれたのは白人兵ではなく、黒人兵だったと記憶しています。

その後、父の勤務していた三菱重工横浜造船所が神奈川区高島台に1戸建ての木造の社宅を20軒ほど造ったのを機にその社宅に移りました。

1戸建てとは言うものの、台所と3畳、6畳の2間だけ、ここに父母、祖母、そして後に生まれた妹を含めると6人の子ども。総勢9人が9畳にひしめき合っただけで生活したのです。それでも、たった6畳ほどの物置小屋からすればマシでした。

引越す前に下見をしたとき、姉が母に「玄関はどこ？」と質問、母は「この台所のドアが玄関と兼用だね」と言っていたことを妙に思い出します。

天井板が張ってなくて屋根は板の上に杉の皮を張った釘が部屋から丸見え、窓には戸袋もないため、台風するときなど一家で窓が飛ばされないように押さえたり、天井の雨漏りがひどくとても寝てられない状況。

食事のお膳を2つ出すと部屋が一杯になり、夕食が終わるとフトンを敷くので、勉強どころではなかった（ちょっと言い訳？）。

食糧難が大変だった。配給は僅かな米や麦、乾パンなどで育ち盛りの子どもの空腹を満たすことはなく、祖母が千葉の幕張方面へ、焼け残った僅かな着物とサツマ芋を物々交換の「買い出し」に行ったが、途中で警察官に没収され、その夜は「夕食抜き」となることもあったのです。

社宅の仲間でも親戚が農家でお米を送ってもらえる人は、白米の大きなおにぎりを、おいしそうに食べているのが、とても羨ましかったものです。

しかし、父たち社宅の親たちはたくましかった。造船所は戦後、造る船もなく、仕事がない中で鍋や釜を作っていたという。

そんな中、会社にある大きな鋸（2人で押して大木を切る）を借りてきて、社宅の裏山の木を切り倒し、畑を作り、麦、芋類、野菜類を作り、食糧難をしのいだのです。

わが家でも家の周りの空き地は、ジャガ芋、サツマ芋、トウモロコシ、ほうれん草から、落花生まで作ったのです。

サツマ芋ができる頃には畑の土を掘ってまだ細い芋に「早く大きくなーれ」と頬擦りをして姉に怒られたりしました。

男は私1人で、姉1人、妹4人の子どもの遊びといえば、カルタやお手玉、オハジキ、そして童謡など歌の大好きだった母に教えられた歌をみんなで覚えたものです。

この経験が、やがて「うたごえ運動」に進むことにつながったのかもしれませんが。

当時、男の遊びでは、社宅のすぐ近くにグラウンドがあったこともあり、野球（三角ベース）をよくやりました。

とはいえ、当時はバットは木の枝を削ったもの、グローブは布製のものが2つしかないため、捕手と一塁手だけがグローブを使い、あとの野手は素手という、ひどい軟式野球でしたが楽しいものでした。

プロ野球は「川上の赤バット、大下の青バット」の時代でした。

社宅の裏山に登ると晴れの日にはくっきりと富士山が見え、心が洗われたものです。

近くの空き地に咲いたコスモスの花が美しく揺れていたのも印象に残っています。

会員の動向

西海亭閉店

西海亭は、2022年末でお店を閉じることにいたしました。

37年の間には、劇団の打ち上げ、イベントや集会、暮れのおせち料理などと注文をいただき、多くの皆様に支えられてまいりました。

ふた月に一度の“西海亭ライブ”も長く音楽の出会いの場を創っていただき、楽しいひとときでした。

皆様、本当にありがとうございました。感謝いたします。

須田 和美 セツ子

訃報 北口信夫さん逝去

文化の仲間会員の北口信夫さんが、病氣療養中のところ去る11月14日逝去されました。66歳でした。長年、音楽活動をされていて、劇団との付き合いも長く、1987年の「ジョーヒル」では劇団の舞台にも立ちました。“西海亭ライブ”でも活躍されていました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

* * *

劇団員による劇団員紹介 第 14 回——藤井康雄さんによる田中耕一さん紹介

常に日常性を疑い自己発展を遂げようとしている

京浜協同劇団 藤井 康雄



劇団の公演「米屋はまだ無事か」「正直・清兵衛」は 6 名の協力出演者の力も得ながら成功裡に終わることが出来た。

ご存知のように田中さんは大谷さん演じる千代田ト斎に対抗する正直者をコミカルに演じ役者としての新しい境地を開拓したと思う。

劇団もジワジワと高齢化しつつあり、計算したことはないが平均年齢は 70 歳台に突入しているはずである。

創立以来から新しい劇団員の確保のために新人教育には力を入れてきた。私は 1961 年四期生で入団、次の年の第五回公演「歌え！わかもの」に出演し今日に続いているが、これまでに劇団の門をくぐった人たちは確実に 200 人は超えているのだが定着率は極めて悪い。それだけに「演劇を極めようとする志」を果たす道のりは相当の困難が伴うという事になるのである。

特に 2000 年代に入ってからそれは極端に低い。いやそれどころか「ゼロの記録」が続く年を重ねることとなる。

田中さんの入団はまさにその最中 2016 年の年の暮れ、49 歳の時だったという。応募者は勿論彼一人、担当者は護柔さんと今は亡き和田さん、最初に取り組んだのが「外郎売り」「カチカチ山」「南京玉すだれ」でこれらは次の年 4 月に「新人演閑期発表会」として披露された。

本格的俳優デビューは同じ年の第 37 回かわさき演劇まつり「ブンナよ木からおりてこい」だ。トノサマガエルのブンナがみんなの反対を押し切って大木のてっぺんを目指しでのぼるのだが様々な困難に直面し

成長していくというお話だ。この中で田中さんはブンナに多大な影響を与えるネズミの役を演じた。小山祐司演山の下、大変苦勞しながらの彼の挑戦が思い出される。

近年では 2019 年三遊亭円朝作「死神」との相手役、2021 年「高瀬舟」での罪人を連行する役人の清楚な佇まい等芸域を広げてきている。

この原稿を書くにあたって以前から少し気になっていたことを訊ねてみた。一見シティボーイ風の彼が、どちらかと言えば楽しさよりも苦勞が伴う演劇を地味に続けている理由だがそれは多分何故演劇をやろうとしたその動機に有るに違いないと。その返事を聞いて私はなるほどと合点がいった。

「それまで演劇と言えば小学校の時にピーターパンを観たくらいでして……」

「なんとといえばいいか……。今までとは全く違った事に挑戦したくなりましてね……」

人間五十歳と言えばそれまでに築き上げてきた生活を守ろうとするのが普通なのだが彼は違っていた。仕事の面で言えば一流企業富士通を退社。友人に請われ彼の会社の手助けをするも、その危機から脱出したとみるや友人の態度も冷たく変わりそこも退社。今では他の IT 企業で主に営業の仕事についている。

サッカーで明け暮れていた青春時代から演劇の道に進み、大企業での平穩な生活よりも友人の危機を優先させるという常に日常性を疑い自己発展を遂げようとしているその姿勢は、勝手な空想だが「ブンナに見習ったのかも知れない」と思ったりする。

今や彼は劇団の事務局長を務め、前回公演の制作責任者を担うなど存在感を示している。

彼の名前田中耕一だが、のどかな田園風景を思わせる。多分地方の出身かと思いきや、なんと出生地は川崎区鋼管通りだという。これも勝手な空想だが自然と共生し豊かな実りある人生を全うして欲しいという両親の思いがこめられていたのではないかと。

今は登戸にお住まい。劇団から車にての帰路一緒の機会多々あり。子供さんは 2 人、未だ未婚で勿論孫は居ない。その寂しさか奥さんと口論しばしば。これは私と一緒に。またまた空想！



「高瀬舟」で、故和田庸子さんと共演

◎文化の仲間通信◎

◆上野の森美術館

日中国交正常化 50 周年記念兵馬俑と古代中国
～秦漢文明の遺産～

日程 11月22日(火)～2023年2月5日(日)
開館時間 9:30～18:00 *入館は閉館30分前まで
休館日 2022年12月31日(土)～23年1月1日(日)
会場 上野の森美術館 1F・2F
料金 一般2,100円 高校・専門・大学生1,300円 小・
中学生900円 チケットの購入方法については
<https://heibayou2022-23.jp/tokyo/>をご確認ください。
1974年に秦の始皇帝陵の兵馬俑坑が発見されてから、
間もなく半世紀。日中国交正常化50周年の節目ともなる
2022年、約1年かけて全国3会場を巡回してきた本展覧会が
上野の森美術館にて開幕しています。
問合せ 050-5541-8600 (ハローダイヤル9:00～20:00)
公式HP <https://heibayou2022-23.jp>

◆東京芸術座 アトリエ公演 45 おんやりよう

日程 2023年2月4日(土)～12日(日)(詳細問合せ)
会場 東京芸術座アトリエ
作・演出 内藤裕子(演劇集団 円) / 出演 梁瀬龍洋・
神谷信弘・脇秀平・さとうゆい (green flowers)・
森路敏・中新井美穂・松並俊祐・小川拓郎 ほか
料金 一般4,000円 U30 3,000円 障がい者割3,000
円 高校生以下2,000円 夜割3,500円 ほか
とある地方の消防署の朝。兼業農家を営む隊員同士の
農業談義から始まる。……
問合せ・申込み 東京芸術座 TEL 03-3997-4341
(10:00～18:00 平日)

◆劇団民藝公演 ノア美容室

日程 2月11日(土)～19日(日)(詳細問合せ)
会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA
作 ナガイヒデミ / 演出 中島裕一郎 / 出演 日色と
もゑ・船坂博子・白石珠江・天津民生・加來梨夏子・
西川明
料金 一般6,600円 夜チケット4,400円 U30 (30
歳以下) 3,300円 (劇団のみ取り扱い・要証明書)
高校生以下1,100円 (枚数限定・劇団のみ取扱い・
要証明書) (全席指定・税込み)
愛媛県に生まれ、京都で劇作を続けるナガイヒデミ
さんの『送り火』『白い花』につづく民藝書き下ろし
第三作。
問合せ・申込み 劇団民藝 TEL 044-987-7711
(月～土 10時～18時)

◆青年劇場 129 回公演 「行きたい場所をどうぞ」

日程 2月23日(木・祝)～28日(火)(詳細問合せ)
会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA



絵手紙 竹間テル子

作 瀬戸山美咲 / 演出 大谷賢治郎 / 出演 奥原義
之・船津基・武智香織・岡本有紀 ほか
料金 一般[前売り]5,200円[当日]5,500円 U30(30
歳以下)[前売り]3,100円[当日]3,400円 中高生
シート1,000円(前売りのみ)(全席指定席)
※本公演は映像配信を予定しています(有料)。詳細
は後日、HPを参照してください。

子どもの未来は無限の可能性がある!? そんなの
嘘!? 生まれた環境で選択肢は限られている!? 子ど
もたちの前にある現実……。子どもたちの未来を
一緒に考えてみませんか?

問合せ・申込み 青年劇場 03-3352-6922

Eメール: info@seinengekijo.co.jp

◆劇団ラニョミリ 第20回公演 時間の遠くに燃える

日程 3月17日(金) 19:30 18日(土) 14:00/19:00
19日(日) 14:00

会場 ラゾーナ川崎プラザソル

原作 大西弘記 / 脚色・演出 水野拓児 / 出演 板垣
けえて・石川房乃・海老名信吾・佐々木政晴・柴田悦
子・とのぎひろこ ほか

料金 大人3,000円 高校生1,000円
(各前売り・当日とも)

TOKYO ハンバーグ主宰、新進気鋭の劇作家大西弘
記氏と劇団ラニョミリ発のコラボ作品。

問合せ・申込み 劇団ラニョミリ 090-6304-6207

Eメール: lanyomiri@gmail.com

◆原発ゼロへのカウントダウン in かわさき
第12回 集会とデモ

日程 3月12日(日) 11:00 から

会場 川崎市中原平和公園

集会予定 11:00開場、模擬店・展示ブース開始 / 12:00
文化行事 / 13:00 メイン集会 / 14:30 デモ行進

メイン講演 金子勝(経済学者)・北村賢二郎(弁護士)
福島原発事故から12年、原発の増設を止めよう!

3年間屋外での集会・デモはできませんでしたが、
12回集会は平和公園で実施予定です。集会の賛同人、
活動紹介ブース・模擬店・文化行事参加者を募集して
います。

問合せ 044-211-0121 (川崎合同法律事務所 三嶋健
共同代表) 公式サイト <https://genpatsuzero.net/>
メール kibounotubasa@gmail.com (事務局長かもした)

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行①

「厳選」大谷敏行の川柳塾
人生は自分に手紙を書く如し
二〇二三年一〇月二七日「日本海新聞」掲載
戦争は進んで命を「国のため」
民主主義 一步前進 二步後退
ヤバイよな敵基地攻撃「知らんけど」
「盾と矛」攻守所を変える仕儀となり
人生は進退窮まる時もある
健康は病んで得られる宝かな
宝くじ一攫千金の捨て所